青水仙、赤水仙

夢野久作

うた子さんは友達に教わって、水仙の根を切り割って、赤い絵の具と青い絵の具を入れて、お庭の隅に埋めておきました。早く芽が出て、赤と青の水仙の花が咲けばいいと、毎日水をやっておりましたが、いつまでも芽が出ません。

ある日、学校から帰ってすぐにお庭に来てみると、大変です。お父様がお庭中をすっかり掘り返して、畠にしておいでになります。そうしてうた子さんを見ると、

「やあ、うた子か。お父さんはうっかりして悪い事をした。お前の大切な水仙を二つとも鍬(くわ)で半分に切って

しまったから、裏の草原へ棄ててしまった。勘弁してくれ。その代り、今度水仙の花が咲く頃になったら、大きな支那水仙を買ってやるから」

とおあやまりになりました。

うた子さんは泣きたいのをやっと我慢して、裏の草原を探しましたが、もう見つかりませんでした。そうしてその晩蒲団の中で、「支那水仙は要らない。あの水仙が可愛いそうだ。もう水をやる事が出来ないのか」といろいろ考えながら泣いて寝ました。

あくる日、学校から帰る時にうた子さんは、「もううちへ帰っても、水仙に水をやる事が出来ないからつま

らないなぁ」とシクシク泣きながら帰って来ますと、途中で二人の綺麗なお嬢さんが出て来て、なれなれしくそばへ寄って、

「あなた、なぜ泣いていらっしゃるの」

とたずねました。うた子さんがわけを話すと、それでは私たちと遊んで下さいましなと親切に云いながら、連れ立っておうちへ帰りました。

二人はほんとに静かな音なしい児でした。顔色は二人共雪のように白く、おさげに黄金の稲飾りを付けて、一人は赤の、一人は青のリボンを結んでおりました。うた子さんはすこし不思議に思って尋ねました。

「あなたたちはそんな薄い緑色の着物を着て、寒くはありませんか」
「いいえ、ちっとも」
「お名前は何とおっしゃるの」
「花子、玉子と申します」
「どこにいらっしゃるのですか」
二人は顔を見合わせてにっこり笑いました。
「この頃御近所に来たのです。どうぞ遊んで下さいましね」
うた子さんはそれから毎日、三人で温順（おとな）しく遊びました。本を見たり、絵や字をかいたり、お手玉をした

りして日が暮れると、二人は揃って、

「さようなら」

と帰って行きました。お母さんは、

「ほんとに温順（おとな）しい、品のいいお嬢さんですこと。うた子と遊んでいると、うちにいるかいないかわからない位ですわね」

とお父さんと話し合って喜んでおいでになりました。

そのうちにお正月になりました。

うた子さんは初夢を見ようと思って寝ますと、いつも来るお嬢さんが二人揃って枕元に来て、さもうれしそうに、

「今日はおわかれに来ました」

と云いました。

うた子さんはびっくりしましたが、これはきっと夢だと思いましたから安心して、

「まあ、どこへいらっしゃるの」

と尋ねました。二人は極(きま)りわるそうに、

「今から裏の草原(くさはら)に行かねばなりません。どうぞ遊びに入らっして下さいね」

と云ううちに、二人の姿は消えてしまいました。うた子さんはハッと眼をさましましたが、この時やっと気がつきまして、

「それじゃ、水仙の精が遊びに来てくれたのか」

と、夜の明けるのを待ちかねて草原（くさはら）へ行ってみました。

草原（くさはら）は黄色く枯れてしまっている中に、水仙が一本青々と延びていて、青と赤と二いろの花が美しく咲き並んでおりました。

校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。